



伊都キャンパス位置図

統合移転の概要

マスタープラン2001空間モデル

マスタープラン2001鳥瞰図

伊都キャンパス・ウエストゾーン

伊都キャンパス・センターゾーン

九州大学は、福岡市西区・糸島市にまたがる伊都キャンパスを学術研究都市の核、総合研究の中核と位置づけ、分散していた旧キャンパスを統合し、2018年度の移転完了を目指して整備を進めてきました。275haに及ぶ大規模な丘陵地の4割(約100ha)を緑地として残し、生態系の種も絶やさないという目標を掲げて保全活動を行い、キャンパス内の水の利用や出土した前方後円墳6基のうち5基、円墳68基のうち38基を保存するなど、自然環境と歴史環境を最大限尊重した開発を行いました。地盤、水工、生態、交通、都市、情報、建築、考古学等の学内外の研究者・専門家の参加型ワーキンググループによって、キャンパス用地の調査分析と計画の検討を行い、できた課題を1つ1つ詰め、必要に応じて計画にフィードバックし、専門家の知恵を結集して、社会に開かれた持続可能性のある大学キャンパスづくりを進めました。

■自主的に開始した環境アセスと不確実性を補填するための環境監視調査 環境影響評価法施行前からアセスメントに自主的に取り組み、さらに評価書における予測および環境保全措置の効果の不確実性を補填するため、学内外の委員からなる新キャンパス環境監視委員会を自主的に設置して、環境監視調査を15年にわたって実施しました。その結果、キャンパスの造成から利用に至るプロセスで周辺地域に環境影響を与えていないことを確認しつつ、情報の公開に努めてきました。(キャンパス計画室 <http://suisin.jimu.kyushu-u.ac.jp/archive/index.html>)

■新キャンパス・マスタープラン2001に基づく実証キャンパスの施設整備 マスターアーキテクト委員会監修のもとで、新キャンパス・マスタープラン2001と5地区の基本設計に基づいて施設設計、建設・管理を実施し、必要に応じてフィードバックしてきました。給水センターによる水リサイクル、水素や風レンズ等の未利用エネルギーの活用、ICカードの利用による利便性の向上や自動運転等の実証実験の場となるキャンパスづくりを進めています。2014年には今後の50年に備えたプログラムとしてフレームワークプランを策定しました。

■「知的拠点」を目指す学術研究都市づくり 本学から地元財界や行政に呼びかけて組織した協議会によって策定した九州大学学術研究都市構想は、地域の「知的拠点」、「知的クラスター」づくりを目指し、4つの理念(共生社会の実現、世界・アジアとの交流、創造性の発揮、新産業の展開)に基づき、公民学が一体となって、大学と連携する企業誘致、分散型地域核、交通ネットワーク、学生と教職員の居住環境、国際化対応、ユニバーサルデザイン等、都市の発展に必要な事項の情報を共有しつつ進めています。

■公民学によるUDCQのキャンパス・コミュニティづくり 住民、教職員、学生、事業者の参加するアーバンデザイン会議九大(UDCQ、九州大学キャンパス計画室と九州大学学術研究都市推進機構の共同事務局)を50回にわたって開催し、留学生の環境、新入生歓迎、景観形成、食文化などのテーマを設定して意見交換し、持続可能なキャンパス・コミュニティの構築に向けて、できるだけ少しずつ取り組み、マップの新入生配布、学生居住実態把握、伊都祭支援、学生まちづくり団体の支援等を行ってこられました。



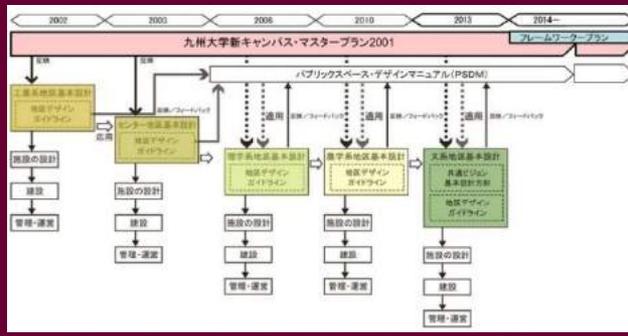
九州大学学術研究都市構想



水素エネルギー施設の拡張用地への立地



キャンパス計画の検討体制



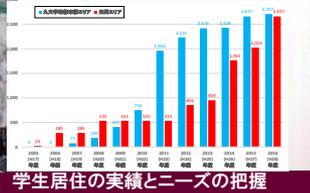
新キャンパス・マスタープラン2001に基づくキャンパス計画フロー



アーバンデザイン会議九大 UDCQにおける意見交換 半島マップを作成し新入生に配布



地域と開催する伊都祭の支援



学生居住の実績とニーズの把握



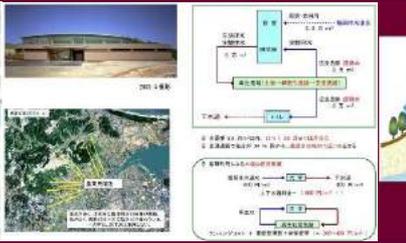
本学オリジナルICカードシステムと糸島市民カードへの展開



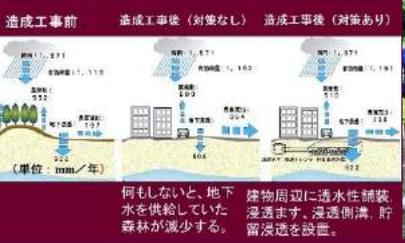
糸島市民カードへの展開



フレームワークプラン2014・計画の配慮条件



給水センターによる水のリサイクル



雨水涵養施設等による地下水対策



竹の伐採と照葉樹林化の取り組み



湧水源の谷部を残した生物多様性保全